

日本IT書紀

066 ターニングポイント

04 含牙篇
卷之九 修羅

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第六十六

ターニングポイント

一

太平洋戦争の転換期は一九四二年六月五日のミッドウェー海戦だと言われる。しかし陸上(島)の戦いを含め流と七月から十一月にかけての五か月が転換期ではなかったか。強いてしほれば、九月・十月、すなわちガダルカナル島の攻防ということになるであろう。

破竹の勢いで勝ち進んだ日本軍の攻勢に歯止めがかかり、アメリカ軍が勢いを盛り返すには、いくつかの幸運と不幸が必要だった。個々の戦局においては、次のような出来事が記録されている。

に着手

8・5

ガダルカナル飛行場完成

7

米…ガダルカナル島に上陸

8

第一次ソロモン海戦

米…重巡洋艦「アストリア」「クインシー」「ヴンセンス」沈没

重巡洋艦「シカゴ」大破

豪…重巡洋艦「キャンベラ」沈没

日…重巡洋艦「加古」沈没、「鳥海」「青葉」小破

ツラギ島の日本軍守備隊が玉砕

日…一木支隊主力がガダルカナル島に上陸

日…一木支隊主力が全滅

第二次ソロモン海戦

日…ガダルカナル島に一木支隊第二梯団と川口支隊が上陸

日…タワラ島を占拠

米…ガダルカナル島イボ岬に上陸

日…伊号第二十五潜水艦が搭載機でアメリカ西海岸を爆撃

日…川口支隊、ガダルカナル島飛行場奪還攻撃に失敗

9・3

8

9

米…空母「赤城」「加賀」「蒼龍」「飛龍」沈没

日…陸軍北海支隊がアッツ島に上陸

7・16

日…海軍設営隊がガダルカナル島に飛行場建設

6・5

ミッドウェー海戦

米…空母「ヨークタウン」沈没

日…空母「赤城」「加賀」「蒼龍」「飛龍」沈没

日…陸軍北海支隊がアッツ島に上陸

日…海軍設営隊がガダルカナル島に飛行場建設

- 25 日…ニューギニア島パプアからブナに撤退
26 日…ガダルカナル島日本軍に物資輸送開始
10・11 サボ沖海戦
米Ⅱ重巡洋艦「ソルトレイク・シテイ」大破
日Ⅱ重巡洋艦「青葉」「古鷹」沈没
23 日…大本営がガダルカナル島第二師団長・川口少将を罷免
24 日…ガダルカナル島総攻撃
南太平洋海戦
26 米Ⅱ空母「ホーネット」沈没
空母「エンタープライズ」大破
日Ⅱ空母「翔鶴」「瑞鳳」大破
11・12 第三次ソロモン海戦（～5日）
米Ⅱ戦艦「サウスダコタ」大破
軽巡洋艦「アトランタ」沈没
日本艦隊Ⅱ戦艦「比叡」「霧島」沈没
16 日…大本営、ガダルカナル島第十七軍に持久戦を指示
28 日…大本営、ガダルカナル島撤退を決定
30 ルンガ沖海戦

この期間、日本帝国海軍は空母四隻、戦艦二隻、重巡洋

艦三隻を失った。これに対してアメリカ太平洋艦隊が失ったのは空母二隻、重巡洋艦三隻で、損害は日本がやや大きかった。だが残存の主力を見ると、日本は空母六隻、戦艦十一隻を保有していたのに対し、アメリカは空母二隻に過ぎなかった。

アメリカ太平洋艦隊の戦艦の多くはやつと真珠湾から引き揚げられ、大車輪で修理が行われている最中だった。航空兵力においてアメリカは増産に次ぐ増産を続け、ようやく日本軍との差を縮めていた。陸海空、ほぼ互角である。

二

何が戦局の転換を促したかという点、生産力である。この年八月十五日付け『機密戦争日誌』はこう記す。

物的困窮に立ち入れる陸軍省は遂に独逸より鉄一〇〇万吨、船五〇万吨購入申込みを議するに至る。窮通か、番町皿屋敷のお化けか。

これを理解するには若干の——風が吹けば桶屋が儲かる的な説明がある。

第二次大戦は、鉄の戦いであった。鉄がなければ戦争の

経営が覚束なかつた。

四二年度の粗鋼生産量は四百二十七万トンが見込まれていた。それは前年度に輸入された鉄鉱石の量から割り出された。しからば来年度はどうであるかという、鉄鉱石の輸入量が激減したために、内閣企画院がはじき出した数字は三百万トンだった。三〇%の減少である。

原因は輸送船舶の逼迫であつた。

日米開戦の四一年十二月時点で、日本が保有していた輸送船舶の総排水量は六百三十万トンだった。このうち百八十万トンを海軍が、二十万トンを陸軍が徴用し、残つた二百四十万トンが国内産業に振り向けられた。

「粗鋼の生産を維持するには、さらに六十万トンの船舶が必要である」

と企画院は言った。鉄鉱石を輸入しなければならぬ。

一九四一年十二月から四二年三月までの間に、十二万七千トンが純増した。日本は連合国軍から拿捕した艦船を哨戒艇に援用し、沈没・座礁した船を浮揚・修理し、懸命に新造した。その結果、この期間は喪失を穴埋めすることができた。

ところが四二年四月から、船舶の損失が急カーブで上昇した。アメリカの潜水艦は、日本の補給船を狙い撃ちにした。戦争資源を絶つ、という作戦である。この戦法はナチ

ス・ドイツが編み出した。

さらに日本は、ガダルカナル島への物資補給で多くの船舶を失つた。その要因はアメリカ艦隊の砲撃ではなく、張り巡らした無線通信網、暗号の解析、潜水艦の活躍に依つていた。

一九四二年四月から四三年三月までに日本が獲得した船舶は、拿捕・浮揚修理三十七万七千トン、新造三十六万二千トンの計七十三万九千トンだった。ところが喪失は百二十五万トンに達し、差し引き五十一万一千トンの純減である。結果、戦地に兵力を送ることや、南方で得た鉱物資源を運搬することがままならなくなった。

粗鋼生産を維持するには六十万トン相当の船舶を確保しなければならぬ。しかし原料の輸送に船舶を回せば、戦場への物資輸送が滞る。

「来年度の装甲の生産量は三百万トンに減少する」

こう聞いたとき、陸軍参謀本部は

「ばかを言うな」と気色ばんだ。

「最低でも三百五十万トンは要る」

と叫ぶ陸軍に対して企画院は答えた。

「それなら全ての船舶を物資の輸送に割り当てなければならぬ」

「ばかを言うな」

参謀本部は別の意味で同じ言葉を吐いた。

このとき参謀本部は、一方で船舶の増徴を要求していた。「十二月五日までに二十四万トン。さらに作戦遂行用に九万五千トン、来年三月までに損害補填用として十六万五千トンがほしい」

合計五十万トンである。

「ばかなことを言うな」

と言ったのは、今度は軍需省だった。そんなにも陸軍に船を持っていかれたら、鉄も石油も手に入らなくなる。

この堂々巡りの中で、ナチス・ドイツに頼み込もうという話が出た。

だが、それはほとんど空想ないし漫画に近い。ナチス・ドイツはイギリスへの渡洋爆撃とロシア戦線を維持するのに精一杯だったし、加えてフランス、ベルギー、オランダなどでパルチザンのゲリラ攻撃に手を焼いていた。だけでなく、どのような手段で運ぶのか。

三

陸軍参謀本部が船舶三十五万トンの増徴に固執したのは、ガダルカナル島に送り込んだ三万五千人の将兵のためだった。戦いを維持するには大量の物資を補給し続けなければ

ならない。

三万五千人が一日に八百七十五グラムの食糧を消費するとして、毎日、約三十一トンの食糧を運ばなければならぬ。そのほかに兵器、砲弾、燃料が要る。これをまかなうには排水量にして数万トンに相当する船舶が要るであろう。

このとき最も頭を痛めていたのは東条英機であったろう。彼は第二次組閣で内閣総理大臣であったばかりでなく、外務、陸軍、軍需の三省の大臣を兼ねていた。陸軍大臣の立場では参謀本部が要求する船舶三十五万トンの増徴を認めるべきだったが、軍需大臣の立場では鉄鋼三百五十万トンの生産確保を優先しなければならない。

それはどう考えても二律背反というものだった。逆立ちしても解決策は出てこない。そのために東条は、内閣総理大臣として決断することができなかった。

東条の意を受けたのは、陸軍省の軍務局長・佐藤賢了である。

一九三八年三月に行われた国家総動員法の審議に際して、議員の野次に「黙れ！」と発言して問題になった。一九三九年、第二十一軍参謀副長（大佐）、四〇年南支那方面軍参謀副長を経て、この年の四月、軍務局長に就任していた。東条腹心の一人といっている。

この佐藤が参謀本部に向かい、

「陸軍に船を譲ると鉄の生産は二百万トンに落ちる」と告げた。

同じ陸軍省の中で意見が真つ二つに割れていた。

「ばかを言うな」参謀本部は怒った。

『機密戦争日誌』十月三十日付

陸軍省軍務局長曰く、①来年度鉄三五〇万トンは絶対確保するを要す、②右保持困難なるが如き作戦は御免蒙る。意中言外に「ガ」島作戦の中止を要求するが如し。

鉄か船か、原料か物資かで大本営が割れている中で、戦争は待ったなしで進んでいた。にもかかわらず、東京では十二月に入っても、船舶の割当てをめぐる意見の対立が収まっていなかった。

十二月五日、東条は臨時閣議を招集した。船舶割当問題に決着をつけるためだった。

その席で東条は言った。

「陸軍に二十四万トンの増徴を認める。九万五千トンの追加徴用も認める」

ここまではよかった。

「ただし、損害補填用は八万五千トンとする」

この決定に参謀本部は激怒した。

『機密戦争日誌』十二月五日付

次長とくに第一部長激怒。無法の統帥干渉、傲慢無礼の閣議決定に至る間に於ける陸軍大臣の態度に対し、嫌き足らずものあり。次長官舎に軍務局長を招致して事情を聴取、激論あり。

第一部長激昂して軍務局長の間に夫々二つずつの鉄拳飛ぶ。軍務局長の反撃冷静なるものあり。種村は軍務局長をして其席を去らしむ。

次官官舎に至り、次官、局長に対し、第一部長より色々説明、陸軍省の善処を要望するところあり。

激論数刻、午前三時に至るも遂にまとまらず、此の間第一部長、大臣との面会を強要するも、陸軍大臣の消息不明を理由として面接せしめず。

翌日、田辺、田中らは陸軍大臣としての東条に面会を強要して、再び激論となった。

このとき田中が激昂して、東条を「バカヤロウ」と罵倒した。

と罵倒した。

東条は内閣総理大臣でもある。

戦争運営の中枢が混乱・分断するなか、大本営は一九四

二年十二月三十一日にガダルカナル島からの撤退を決定、翌四三年二月一日から撤退開始、七日完了までの間、日本の船舶による輸送力は排水量に換算して七万七千トンが失われた。四月十八日、ソロモン上空で連合艦隊司令長官・山本五十六が戦死した。第六十六

~~~~~ 補 注 ~~~~~

**アッツ島** アリユーション列島の島で、一九四二年六月、ミッドウエー作戦に呼応して①哨戒線の前進②米ソ連絡網の遮断③アメリカ軍による航空基地利用の阻止——などを目的に、陸軍北海支隊と海軍北方部隊が上陸し占拠した。しかしミッドウエー作戦で連合艦隊が敗北したことにより、アリユーション列島の戦略的な価値が無くなった。米軍の反攻が強まる中で大本営はアッツ島とキスカ島を無策のまま放置することになった。

一九四三年五月十二日、アメリカ軍は戦艦三、空母一、重巡三、軽巡三、駆逐艦十二の艦隊が支援して第七歩兵師団一万一千人をアッツ島に上陸せしめ、北海守備第二地区部隊二千六百五十人と激戦が展開された。五月二十九日、日本守備隊の残存三百人は山崎保代陸軍大佐ともども玉砕した。

**山崎保代**・やまさき・やすよ／1891～1943。山梨県都留郡禾生村に生まれ、一九一三年陸軍士官学校を出た。四〇年三月歩兵大佐に昇進して歩兵第一三〇連隊長、四三年二月潜水艦「伊三二」でアッツ島に着任した。玉砕後、二階級特進して中将となった。

**ツラギ島** 旧ソロモン王国の故地で、ガダルカナル島の向かいにある。一九四二年五月に日本軍が占拠し、三か月後の八月八日にアメリカ軍の攻撃によって守備隊が玉砕した。同島の東側にあるガブツ島とタナンボゴ島は日本軍航空隊の水上機の基地で、ツラギ島と同時にアメリカ軍が奪回した。ツラギ、ガブツ、タナンボゴ三島の日本軍守備隊は約千百人だったが、生存者はわずか三人

だった。駆逐艦「菊月」と輸送船「第三利丸」が座礁したまま放置されている。

**タラワ島** イギリスの植民地だったが日本軍の上陸によって独立し、現在はキリバス共和国となっている。日本軍はこの島に陸上局地戦闘機「隼」、九七式攻撃機を配備していて、上陸してくるアメリカ軍におおきな損害を与え、一度は撃退することに成功した。アメリカ軍にとつてのウエーキ島に等しい。四三年十一月二十一日早朝に始まった陸戦は二十三日夜に集結した。日本軍の戦死は四千七百十三人、生存は百六十人、アメリカ軍の戦死は一千九人、戦傷は二千二百九十六人だった。



# 日本IT書紀 066 ターニングポイント

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。